

・「犯罪者－被害者－環境」が犯罪者にとってチャンス

いかに兇悪な犯罪者がいても、獲物がいなければ、犯罪は起こりようがない。犯罪者と標的がいても周囲（環境）を警察官が取り巻いては、これまた犯罪は起こりようがない。

犯罪は、犯罪者－被害者－環境という三者が混じり合う交点において起こる。犯罪者はこの一点を「機会」ととらえる。逆に、被害者にとっては「死角」である。「機会」と「死角」は、そういう表裏一体の関係にある。

・20メートルの距離

いずれの犯罪者もこの20メートルの距離にいたって、「ここでやる、この獲物をやる、本気でやる」と意思を固める。心理的な探索状態から個別具体的な襲撃マインドに変わる。狙いを定め、隙をうかがうのだ。

この意思決定を支えるのは、元犯罪者たちの証言や調査によれば、「いい獲物がある」「見咎められない」「やりやすい」という三つの心理だという。ここまで来ると犯罪者自身が本当に気にするのは、獲物の評価や周囲に見咎められないことより「今、やりやすいか否か」、すなわち一瞬の「機会」があるかどうかである。

・怪しい人は「コンタクトを取ろうとする」

変な人と怪しい人を分けるのは、「コンタクトを取ろうとする」かどうかである。ちょっと、などこちらに話しかける。笑いかける。後をついてくる。関心を引くような動作をする。じっと、あるいはチラチラ視線を投げかけてくる。微笑みながら見つめてくる。これらはすべて会話にはならないが、一種のコミュニケーションである。

会話には、言葉によるもの（話しかける）と、言葉にはよらないもの（あなたと何らかの関係を持ちたい、という意味を含めたメタ言語）の二種類がある。怪しい人は、特にメタ言語に「お前を自分のものにしたい」という、強いメッセージを込めて一方的に相手に発信してくる。

被害者が気づいているかどうかは別として、犯罪行動を起こす前のほぼ全員が、眼差しなどによる無言のメッセージを飛ばす。これに被害者がつい微笑んだり、軽く挨拶してしまったり、あるいはパイと横を向いたりしても、何らかの会話が成立したと考える。

言葉であるか、メタ言語であるかを問わず、見ず知らずの人に会話を求める人には何らかの下心がある可能性が高いと見なくてはならない。道を尋ねられたら応対するとしても、少しでも「変だ」と感じたら、こうした会話は無視するか、キッパリ断る必要がある。そうしないと相手は必ず自分のいいように解釈し、行動してくる。

・無差別殺人といえども、無意識に獲物を選んでいる。

無差別殺人という言葉がよく使われるが、まったく相手を選ばない無差別犯罪者はいない。無差別とメディアに表現されても、当の犯罪者が「誰でもよかった」と言ったとしても、彼らは無意識に獲物を選んでいる。

覚醒剤のフラッシュバックが引き金となった深川通り魔殺人事件（一九八一年）をはじめとして、自殺できないから死刑を得ようとした秋葉原通り魔事件（二〇〇八年）やJR 取手駅西口事件（二〇一〇年）。理由は薬物中毒であれ自殺志願であれ、犯人は、やれると思った者から狙っている。

若者によるオヤジ狩りもそうだ。狙われる対象は、酪酊し、人気のない夜道を一人で歩いている体力が落ちた中年過ぎの男性が多い。いかに酔っていても、見るからに筋骨逞しい男性は狙わない。狩りにいった方が、返り討ちにあう可能性があるからだ。

・「近づきやすく、逃げやすい」場所にいる者を狙う

全体として見ると、犯罪者の欲望の対象が、やはり「近づきやすく、逃げやすい」場所にいる者だということが分かる。

「夜十時過ぎに駅前のコンビニで張ってたら、好みの女がいました。顔は狐顔で、ナヨ

ッとした感じ。服もアパーで好き者の感じ。濃いめの化粧。その女がコンビニを出て行くのをつけていった。最初は大きな通りで家に帰る人が多かったが、だんだん人が減って、女が横丁に入った。通りには誰も居なかった。今だ、と飛びつきました。女がギャーッ！とすごい声で叫び、バッグを振り回したのでヤバイと思い、来たのと反対向きに走って、すぐに道を折れて逃げた。捕まるんじゃないかと怖くて、家に帰ってじっとしていました」 （「アマ」の路上抱きつき犯）

・「歩いてもたった一分だから」などと考えるはならない。

「そうですね、私の場合は、最初はつけていく。帰る道が分かっていたら、途中で待ち伏せる。まあ、つけて行くのが多いな。それから相手が気にしはじめたら、少し遠目に歩いたり、道の反対側に移る。でも、相手の家が近いと思ったら、音を立てないように早足で歩いて近づく。他に歩いている人が見えなかったら一気に抱きつく。この『一気に』が大切。アレー！なんて言いながら、大概是顔を伏せてうずくまるか、走りだそうとする。どっちにしても、こっちは好きなのところを触る。触るのもいいけど、抱きつく時、やるぞ、と心にズキンとくるのがいい」（「アマ」の路上性犯）

・噛みつく

口を塞がれるのは、生命の危機に直結する重大な事態だ。できるかぎりの、最大の抵抗を瞬時にとらなくてはならない。「掴んでいる手の親指を、両手でぐっと反り倒す」という方法がある。大の大人が、その場で失神してしまうぐらい威力がある。ただ、実際に行うのは難しいかもしれない。ずっとやりやすいのは「噛みつく」ことだ。

人間の噛みつく力には凄いものがある。成人の男女では80キロ近くに達し、ラブラドルの57キロをゆうに上回る。ライオンやトラの300キロ前後の四分の一の力だが、肉は食いちぎれる。顔や体にまとわりつく、剥き出しの腕や手に噛みつくのだ。それなら襲撃者に、いかに非力な女性や子どもでも十分立ち向かえる。イギリスの安全体験施設では、噛みつくことを真剣に子どもに教えている。

大切なのは、実際に噛みつくことだ（それも素早く）。そして噛みついたら、相手が悲鳴をあげるまで離さない（二〇〇九年、東京で幼稚園児がこれで助かっている）。この間に襲撃者は「ぶっ殺すぞ」と脅したり、頭を無茶苦茶に殴ったりするかもしれない。しかし、こうした言葉を吐かれても実際に殺された例はこれまでにない。

だから、心を決めて思い切り噛みつくことだ。弱者を無法に襲う者は、肉を食いちぎられることぐらい罰として当然である。

・屋根瓦をはずして侵入

「昔、爺さんと婆さんの二人暮らしの家に、コツコツ貯めた大枚の現金があるのを知って狙いました。二人とも病院に出かける隙があったが、家の周りは格子があり、厳重で、どこを探しても入れそうな場所がない。考えた末、家の横にある大きな木に登り、枝を揺すってブランコの要領で屋根に飛び移りました。

家の間取りは前もって頭に入れていた。ここだ、と思う場所の屋根瓦をはずして天井裏に入り、押入れのベニヤ板を足で壊し、中にあった手提げ金庫を小ドライバーで壊し、大金を手にとグッと握った。こういう手口は初めてだったが、自分が狙ったら絶対に不可能という家はなかった」

・犯罪者との闘いは、野獣との闘い

寝ている部屋にまで侵入され、何かを強要された場合はどうするか。体力十分な男性、よほどの心得がある者でないかぎり、抵抗するのは危険である。

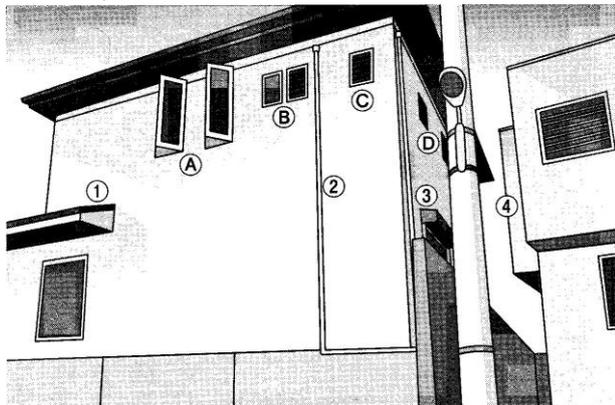
異常なほど図々しいか、被害者の生活を熟知している場合を例外として、ほとんどの犯罪者は自分も怯えている。「殺すぞ」という脅し文句は、犯罪者自身の怯えの裏返しであることが多い。しかし生半可な抵抗をすると、犯罪者の怯えの反動として凶行に至る可能性が高い。ぱったり顔が合ってしまい一突き、はあり得る。

・・・

ただ、その要求を拒絶したいなら、野獣のような決死の抵抗をする他ない。「助け

て！」と叫ぶだけではない。噛みつき、加害者の肉を食いちぎるほどの意思を持って挑みかからねばならない。犯罪者との闘いは、野獣との闘いである。

- ・この家に侵入するには4つのルートがあるという。



「この家に侵入するには四つのルートがある。
①の屋根に登ってAの窓を割る。この窓はおそらく居室か寝室の窓。②の樋を伝いBの窓から入る。この窓は階段の窓。同じくCの窓を破って入る。この窓は階段横の小部屋の窓。最後は③の小庇に立ってDの窓から入る。この侵入が一番やりやすい。電柱もある。もしDの窓があいていれば④の隣家の出窓から飛び込む。我々プロは狙った家は確実にやる」

- ・警備会社のステッカー

泥棒によっては、「警備会社のステッカーは、この家には警備が必要なほどのモノがある、と教えてくれる」と考える。

- ・イギリスの大型ベル

イギリスの家屋では玄関の上の壁に**大型ベル（ドラム）**が設置してあり、泥棒が窓や屋内に張られたセンサーにひっかかると、けたたましい音を鳴らす。それを聞いた近隣みんなで追いかけて、捕まえるという仕組みである。設置と運営管理は電力会社が行っており、**大きなドラムは嫌でも目にとまる。**

イギリスの侵入盗犯は、「ドラムが一番嫌だ。鳴らないようにするのでとにかく疲れる」と言っていた（英ハートフォード警察で、二〇〇〇年）。

- ・「パピペット」の音を嫌う

嘘みたいな話だが、彼らは目玉を動かしても音を感じるという。音を出さないための手足の使い方、腰のひねり方、呼吸の仕方までである。

ともかく共通して「**パピペット**」の音を嫌う。パチ、ピキ、プス、ペキ、トンといった、**普段聞き慣れない軽い音**である。これにスーヤズーという音を加える者もいる。勿論、ベギ、バギ、ドス、ドスン、ジャリ、ガキン等の重い音はいうまでもない。しかし、パピペットの音のような「**つい出てしまう音**」は本当に嫌だという。

逆に言えば、守る側はそういう音が出るように敷地周りを工夫すればよい。

- ・2階から侵入を狙う

「泥棒は家の周囲を周り、**一階に錠がかけてある場合、二階を狙います。**その時、足場になるものを探す。もし家の横に電柱、植木、物置があれば、また手足を掛けられるもの、例えば雨樋、クーラーの配線、水道のパイプなどがあれば、簡単に侵入できます。…」

・クレセント錠は鍵ではない

意外な盲点がクレセント錠である。そもそもクレセント錠は錠というより、窓の密閉性を強める一装置に過ぎない。しかし、この装置を錠と思いこむ者が多い。クレセント錠をかければ、鍵が掛かったと思い込んでしまうのだ。

ノウハウは述べないが、実は、クレセント錠は何の破壊をせずとも、工夫をすればひとりでに上下するようにはできる。

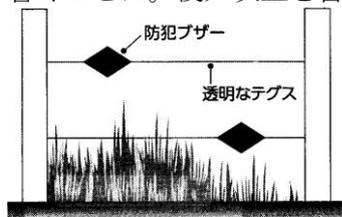
・・・

盲点は他にも幾つもある。アルミサッシの上の天窗（人間の体は楽に通る）、風呂場によくあるガラス製ルーバー窓（ガラス板を一枚ずつ外して侵入できる）、**アルミ製の格子（もぎ取り、へし曲げて枠ごとすぐに外せる）**、オートロック式の玄関ドア（紙一枚あれば開けられる）、…

・釣り糸センサー

用意した防犯ブザーの一端に釣り糸（透明なテグス）をつけ、反対側にも長めにつける。その両端を家のどこかに貼り付ける。防犯ブザーや糸の端を貼り付ける際は、瞬間接着剤などで外れないようにしっかり付ける。場合によっては結びつけてもいい。コツは糸が弛まないようピンと張ることだ（図）。

設置が簡単、何より安くて済む。張る高さや長さは自分で調整できる。雨対策はビニール袋でブザーを包めばよい。長所は、一度鳴り始めたら誰かが止めないかぎり、鳴り響くことだ。侵入次皿を含む犯罪者にとって、鳴り続ける不意の音ほど嫌なモノはない。



・割れ窓理論

一九九〇年代後半、犯罪都市と呼ばれたニューヨークの治安はめざましく改善した。この時、ルドルフ・ジュリアーニ市長が採用したのが有名な「割れ窓理論」(Broken Windows Theory)であった。割れたままの建物の窓、あるいは落書きやゴミは管理者の不在を感じさせ、やがて凶悪犯罪につながるという環境犯罪学の理論にもとづき、軽微な犯罪から徹底的に取り締まったのだ。

・災害後に犯罪が多くなる

「読売新聞」二〇一二年二月二十二日夕刊は伝えている。

「1995年の阪神大震災後、神戸市の調べでは市内の小中学校で窃盗（万引き）が、震災前3年間の平均に比べて22%、中学で11・6%増えた。無免許でバイクを乗り回すなどの問題行動を起こす中学生は、2倍以上に増えた。兵庫県教委の調査でも教育的配慮が必要な児童生徒は震災後に増加し、減少傾向に転じたのは99年度からだった。同県教委では仮設住宅での生活や、度重なる転居など生活環境の激変が、児童生徒にストレスを与えたと分析している」